

新島襄と祖父・令弟



岩井文男

はしがき

創立者新島襄の祖父（辨治）と令弟（雙六）の墓所は、群馬県安中市の妙光院にあるが、このたび、「新島襄先生祖父と令弟之墓所」という標識が完成、昨年十二月二十日、妙光院において除幕式が行われた。

これまで、同志社関係者や外人などが、墓参のために訪ねて来ても標識がなくわかりにくかったのが、新島学園の岩井文男校長と関係者の尽力によってこの標識が建立されるに至った。その経緯の概ねは次のとおりである。

昨年の秋、岩井文男氏が同志社に理事長を訪ねて見えた際、この標識の件が話題にのぼり、一度現地を見ようということになって、斎藤理事長、服部庶務部長が安中を訪問され妙光院に於て、岩井氏を始め、妙光院加藤住職、広神石材店主、田中氏（安中教会員）の諸氏を交えて相談の結果、記念碑を建立することが決定され、早速、住谷総長の揮毫をいただき、この完成をみたものである。

以下は、この標識の除幕式における岩井文男氏の祈禱式文である。

（編集部）

「新島襄先生祖父と令弟之墓所」標識除幕式における祈禱式文

昭和四十九年十二月二十日

午後一時 妙光院において

恩愛限らない天の父よ！！

我らは日々夜々限らない恩寵のみ手に支えられ、至らぬ者ながらも、それぞれの部署において、大みわざに参画することを許され、心から感謝を申しあげます。

みそなわすように、ただ今我らは新島襄先

生の祖父と令弟の墓前に集って、そのご腹福を祈りながら、このたび新たに建てられた墓所標識の除幕式を執り行わんとしております。滞りない式の進行を懇願いたします。

ここに眠るご両名は、日本の明治黎明期に生活しておられた方々であります。またこの期における偉大なる先覚者であり、真の教育者であった新島襄先生の肉身でもありません。祖父辨治翁は先生の幼少時代の魂に強い感化を及ぼされた優れた見識者であり、令弟雙六氏は先生最愛のただ一人の表弟でありました。別けても祖父辨治翁の存在は後日の新島襄先生の存在の方向を決定づけたと言っても過言ではありません。

新島家は言うまでもなく幕臣ではあったが開国日本の明日に覚めつつあった少年新島の心に深い同情を寄せて居られたのは翁であ



「新島襄先生祖父と令弟之墓所」標識

り、函館脱出の心意を悟って「行けるならいつて見て来よ花の山」の句をもって、心の深層において、この企てに対して密かなる共鳴を送りつつあった者も翁でありました。故に翁は後年の新島襄先生の霊性の基礎教育を実行された方であったと言ってもよいのであります。令弟雙六氏は元治元年三月十一日夕刻新島先生が決意を胸中に秘して親族と別れを告げて函館に向かう途中までこれを見送り、涙ながらにお別れをなされた方であります。

在米中先生が同氏に寄せられた書簡を散見しても、その激励忠告等の言葉の中に切々たる愛情は随所に溢れており、いかに先生が、令弟の後日に期待をかけて居られたかを知ることができます。

しかるにご両名とも先生在米中に惜しくもこの世を去られました。祖父辨治翁は明治三年七月十四日八十五歳、令弟雙六氏は翌明治四年二月七日二十五歳で何れも永眠され、妙光院のこの場所に葬られたのであります。

新島先生の帰国、即ち明治七

年十一月二十九日早朝、安中新屋敷においてご両親と涙の対面をなされた時は、なつかしき、このご両名の姿は地上に見るべくもありませんでした。その後妙光院歴代の住職の誠意によって、ご両名の墓域は清掃せられ、その霊は慰められて今日に至っています。ここに改めてこのご好意に感謝を申し上げます。

今回同志社の発意に基づき、妙光院加藤住職の格別なるご好意と広神石材店主（同志社の良心碑の刻字者）の尽力によって、この霊域の新装が成り、ここを訪れ墓参をする者のために、住谷悦治同志社総長の麗筆をもって新たな目じるしとなる永久標識の建設を見るに至りました。誠に喜ばしい限りであります。

このために配慮下さった関係者一同に対し深甚なる謝意を表すると共に、不思議なる天父の摂理に思いを馳せて感謝を捧げます。

願わくは、ここに眠るご両名の霊の上に、天父の恩寵永遠に豊かに在りますように、かつ又新島襄先生を通じて、その霊脈を継承している同志社学園の上に豊かなる恩寵の導きを祈り奉ります。主イエス・キリストによって聴きあげ給え。アーメン。

（新島学園校長）